

テングチョウ *Lybithea lepita caltoides*; ssp. *amamiana*

「”天狗”チョウの標本写真をひと目みて何を感じますか？比較のために実際の大きさをテングチョウなみに小さくしたクジャクチョウを並べてみましたが、どこが違うかわかりますか？」

チョウは胸部などにある複数の気門で呼吸し、顔面に鼻という器官はなく、テングチョウでは触角の基部から天狗の鼻のように目だって突出した部分があって、これはクジャクチョウにも見える一対のバルピ：下唇鬚（かしんす：味を感じる感覚毛が密生した部分で口吻から吸い上げる液汁の食物としての適否を判定する感覚器）が長大に発達し2本が合わさるように突出したもの。この突出した鼻に似た特徴をもつことにちなんだテングチョウという命名は実にみごとだと思う。アメリカでも「鼻の蝶：The Snout Butterflies」と呼び、その第三紀層（6500-170 万年前）からこのチョウの仲間2種類の化石が出ていることから「生きた化石」ともいわれ、古い起源のチョウとして知られている。



June 18, 1962 高知梶が森



80819 入笠山 クジャクチョウ

テ
ン
グ
チ
ョ
ウ
は
ヒ
オ
ド
シ
チ
ョ
ウ
と

同じく幼虫がエノキの葉っぱを食べて育つが、ヒオドシチョウが鹿児島北部を南限とするのと違って暖地性で、北海道では札幌などに記録があるものの今ではほとんど見られないという。奄美大島以南では沖縄八重岳産の写真に示すように前翅の湾曲した部分の角度が90度以上と広く、それより北ではほぼ90度であるなど翅型に差があり亜種として区別されている。幼虫を驚かすとシャクガなど蛾の幼虫がやるように糸を吐いて落下するというチョウには珍しい挙動が見られる。また、蛹が尾端を90度近くに強く屈曲させて葉っぱと平行の姿勢をとる習性があるが、分類学上亜科が異なるインガケチョウの蛹でも見られる特異な挙動である。なぜまっすぐに下垂しないのか、曲げることのメリットがあるとすれば少しは目立たない

かなと推定できるがよく分からない。ヒョウモンチョウ類にもギンボシヒョウモンなどこの習性をもつ種がいるとのこと。発生のピークとなる6月中旬、ときには大群となって地面の湿り気に群がる光景がみられ、かつて兵庫県佐用町で数百頭はいたと思える壮観な吸水集団に出会っている。その群れの中に踏み込むと

まさにテングチョウの花吹雪。その日は民家の庭先にもうじゃうじゃと乱れ飛んでいて、住人のおばちゃんが「気持ちが悪いくらいよ」とあきれていた。参考：June 7, 2014 の記録；
<https://www.youtube.com/watch?v=6AouOUFwqnE>

このテングチョウ、以前は、ヒオドシチョウのように盛夏に休眠したのち秋に再び活動し、すべてが成虫で越冬するものと思われていた。ところが6-7月に再び産卵をして2回発生したケースや、10月に幼虫が観察された事実などから、第一化の個体がすべて1年長生きするとはいいきれなくなっており、興味ある研究課題として残る。

幼虫がエノキの葉を食べるチョウとしては、他に幼虫で越冬するゴマダラチョウやオオムラサキがいる。大人になってもいつまでも”くちばしが黄色い”チョウがゴマダラチョウで、”くちばしが赤い”スミナガシというチョウもいるからチョウの世界は楽しくなる。tenngu